



南 ぬ 風

一般財団法人 沖縄美ら島財団 広報誌

ふえーぬかじ

53
— 2019.10~12 —
秋



「観光の日」セレモニーのようす

「夢を持てる産業」であること。年間1,000万人近い観光客が訪れるにも関わらず、観光業界における給与をもらっていたり、役職についている方もいる。観光のスターを業界から作っていくことが大事だと思えますよ。「あの人がみたいになりたい」「ああいうホテルで働きたい」といった目標になるような企業が増えていくことが、強い観光とそれを支える人材のステータスの向上に結びつくと考えています。

「強い観光」は、観光が国際化している今だからこそ、重要性が高まっているんですね。

外的要因の影響を受けやすい観光産業だからこそ、観光客の方々へ直接向き合うことが重要です。OCVBでは、2019年8月1日の「観光の日」に那覇空港国際線ターミナルで終日、外国人観光客の歓迎セレモニーを実施しました。例年、観光の日にはさまざまなイベントや式典を行います。OCVBは沖縄観光の旗振り役としても皆さまから期待されていますので、日頃から率先して動きたいと考えています。

「観光は総合産業と言われますが、OCVBでは他の分野とどう関わりながら活動を展開していきたいとお考えですか？」

まず、観光ネットワークの強化が重要ですね。観光客との接点がある産業として、沖縄美ら島財団(以下、財団)をはじめ、公益財団法人沖縄県畜産振興産産公社や株式会社沖縄県物産公社、公益財団法人沖縄県産業振興公社、公益財団法人沖縄県文化振興会など、各種団体との連携の強化を図りたいと考えています。互いの持っている情報を共有し、活用することで、観光収入が増え、県経済が潤います。

次に、ICTの活用。キャッシュレスは各所で進んできていますが、通信業界では2020年には5Gが実用化されます。デジタルマーケティングの力を、それぞれの産業の分野が付け

ていく時代に来ているのです。そこでOCVBでは、委員会を立ち上げ、県内外の方々にも委員として入っていただき、観光業界における具体的な対応策を導き出してみたいと考えています。

さらに、将来の沖縄を築く基盤となるのは、人材育成。これからの観光を担っていく人材に、より新しい取り組みについて学ぶ機会を提供していきたい。また、現在従事している方々の学び直しも重要です。これはオンラインの学習をベースに行いたいと考えています。

「大都市圏ではそうしたリカレント教育が教育産業として一大マーケットを築いています。物理的な障壁がある離島県でオンライン教育のメリットは大きいですね。」

実のある人材育成にしたいと、新しい技術の導入を考えました。ICTを観光業界のみならず積極的に使ってもらい、学び直しをすることで産業の強化につながれば、本島、離島を含めて全域の現場の人たちが交流できる場をオンライン上で設定し、観光ネットワークの強化も図っていききたいですね。

「好調な沖縄観光ですが、一方でオーバーツーリズムへの対策も求められています。」

アジアの経済成長や、2020年の那覇空港の滑走路の増設など、沖

縄における人の動きは今後ますます大きくなるでしょう。それに伴って地域への負荷が増えている現状もあります。宮古島を例にとると、地価の急上昇による家賃の高騰や、観光客の急増でタクシー不足となり地域住民が利用できないといった問題があります。観光がもたらすプラスの要素を見据えながら、マイナス要素への対策もきちんと打っていくべきです。

その一方で沖縄には守るべき自然や文化がある。これからの沖縄観光は、入域者数の増加を目指すだけでなく、地域特性への配慮をすべきだと思えます。地域や島によつては、入域者数の制限などを視野に入れたゾーニングも求められるでしょう。それぞれの自然と文化の価値を再認識した上で、お客さまにもさらに深い満足、感動を与えられるか。沖縄の自然は大切な観光資源でもあります。こうした難しい時代であっても、自然をしっかりと守り育て、活用していくことが必要。お客さまとの接点を持ちながら、同時に研究開発も担っている財団の果たしている役割は沖縄県全体にとつてもものすごく大きいと思います。今後私たちOCVBが質の高い観光を目指すにあたり、財団との人材派遣交流や、行政分野との共同研修、スタッフの海外派遣なども含め、より連携を強化して取り組んでいきたいですね。

自然や文化を守り育てながら、質の高い観光を実現させる。



一般財団法人
沖縄観光コンベンションビューロー 会長

下地芳郎

SHIMOJI YOSHIRO

文 しのうえちず

沖縄県宮古島出身。1981年明治大学卒業、同年沖縄県庁入庁。2011年4月、沖縄県文化観光スポーツ部観光政策統括官などを経て、2013年3月に退職。2016年6月株式会社琉球銀行取締役、2018年4月国立大学法人琉球大学国際地域創造学部教授を歴任。2019年6月より現職。

夢を持って携われる地域の基幹産業となるよう「強い観光」をめざす

下地芳郎氏は、1995年に初代沖縄県香港事務所長を務め、その後沖縄サミットの事務局や観光部局で活躍。退職後は国立大学法人琉球大学国際地域創造学部教授として人材育成と地域活性化に取り組み、2019年6月、一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー(以下、OCVB)の会長に就任した。約20年にわたり、沖縄の観光振興に取り組んできた実績から、運営の基本3方針として「観光ネットワークの強化」「ICTの活用」「観光人材育成強化」を掲げる同氏に、沖縄観光の今とこれからについて話を聞いた。

contents

美ら島をつなぐ人	02
おきなわ暮らしのカレンダー	04
沖縄 美ら水族館で出会える生き物	05
熱帯植物ずかん	05
調査研究	06
普及啓発	08
御城物語	09
沖縄いきものコラム	09
運営管理	10
スポットライトの向こう側	12
財団いんふお	14
編集後記	15
おもろさうしの植物	裏表紙



作品タイトル「話のつづき」 沖縄県立博物館・美術館長賞

親元を離れ出てきた沖縄で、家族への感謝、文化や人々との出会い、毎日の積み重ねを実感した平野さん。自身の思いを表現すべく、モチーフに選んだのは地層だった。モデルとなったのは、名護市にある嘉陽層の褶曲。岩絵具と水干絵具で塗りを重ねた立体的な表現は、何千万年も積み重ねられてきた地層さながらの重厚感が漂う。

沖縄県立芸術大学大学院 絵画専修
平野 恵子さん(東京都出身)

51号から54号までの1年間は、沖縄県立芸術大学・大学院造形芸術研究科「第30回卒業・修了作品展」で受賞した3作品および推薦作品が表紙を飾ります。若い才能にご注目ください。

誌名「南ぬ風(ふえーぬかじ)」とは…
南ぬ風は、梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことで、この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信していきたいと思っています。

おきなわ
暮らしの
カレンダー

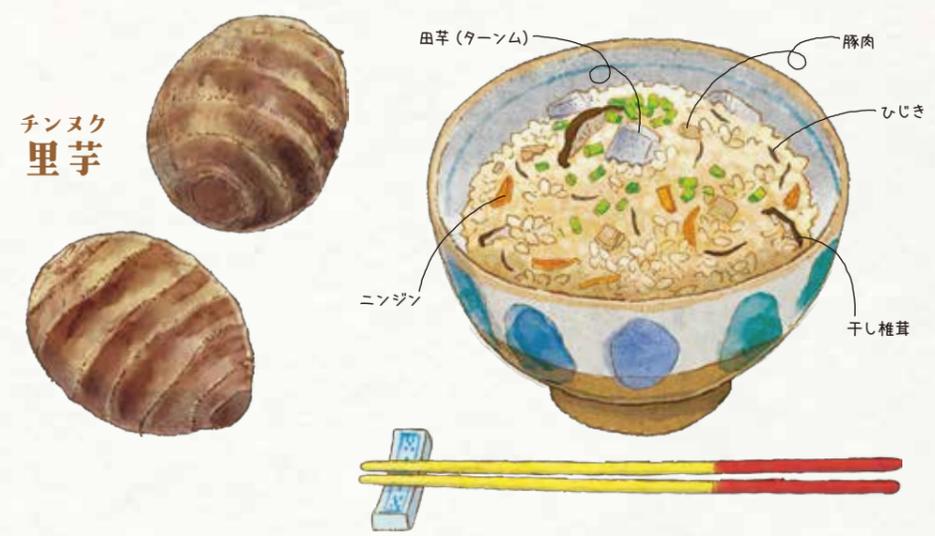
vol. 6



「トウンジージュージー」

トウンジーとは冬至のこと。二十四節気の二十二番目で、北半球では1年のうちで太陽の出ている時間が最も短い日だ。季節行事を旧暦に基づいて行う沖縄で、冬至は新暦に合わせる。約3千年前の中国で作られた二十四節気は、1太陽年を24等分するという考え方で、そもそも旧暦とは無関係であるためだ。古代中国では冬至を1年の始まりとし、今も中国では冬至はお祝いの日。日本では全国的にゆず湯に入ったりカボチャを食べたりするが、沖縄では「トウンジージュージー」をつくり、各家庭の台所で祀るヒメカン(火の神)や仏壇にお供えして、家族の健康や子孫繁栄を祈って食べるという習慣がある。

ジュージーとは沖縄の言葉で雑炊という意味。2つのタイプがあり、一般的な雑炊タイプを「ヤファラ(柔らかい)ジュージー」「ボロボロジュージー」、炊き込みご飯タイプを「クファ(硬い)ジュージー」と呼び分ける。冬至をはじめ、折々の行事で食べるのはクファジュージーのほうが。



ジュージーの基本的な具材は、豚肉、ニンジン、干し椎茸で、ひじきや昆布を入れることも。お盆の初日に食べる「ウンケージュージー」には新しょうがの葉を刻んで入れる地域が多い。



ターナム
田芋

ターナム。ゆでてつぶし、甘く煮たきんとん状のディンガク(田楽)や、揚げて甘辛く味付けした揚げ煮は定番。茎の部分は「ムジ」と呼ばれ、汁ものなどに使われる。

地域によって具材に違いはあるが、トウンジージュージーにはタロ芋の一種であるターナム(田芋)を入れることが多い。その名の通り水田で栽培される芋で、親芋に子芋、孫芋が連なるようにできることから、子孫繁栄の象徴とされる。縁起ものとして、他の季節行事でもよく登場するおなじみの食材だ。産地として有名なのは、金武町や宜野湾市大山などで、伝統的に湧き水が豊富な場所栽培されてきた。水田を作れない地域では、畑でとれるチンヌク(里芋)を使うことも。

甘藷が主食だった貧しい時代、手間ひまかけて作るジュージーは年に数度のごちそうだった。現在は手間を省いてレトルトの「ジュージーのもと」を使う家が増加中。その場合、副菜にターナム料理をつける例が多いようだ。子孫繁栄も、気は心だろるか。

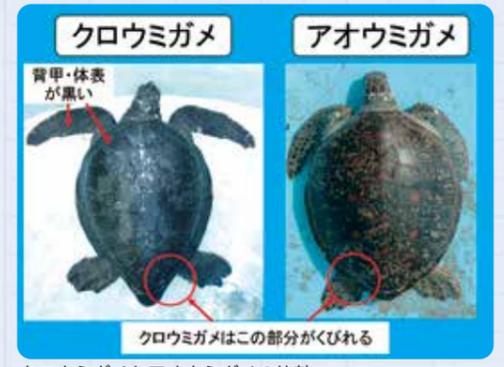
(文いいうえちず)

沖縄 美ら海水族館で
出会える生き物 Vol.13

和名: クロウミガメ 科名: ウミガメ科
学名: *Chelonia agassizii*



クロウミガメの幼体(2017年生まれ)



クロウミガメとアオウミガメの比較

クロウミガメは主にガラパゴス諸島など、東太平洋に生息するウミガメで、稀に日本に回遊してくることがあります。よく似た種であるアオウミガメとは、体表の黒さと背甲の後肢付け根のくびれ部分で見分けることができます。

海洋博公園ウミガメ館では1999年に雄の飼育を開始し、2015年から展示水槽にて雌雄同居を行いました。2017年3月、エコー検査によって雌個体の体内に卵黄の発達が初めて確認され、同年春には交尾も見られました。その後、7~8月の間に5回の産卵を行い、合計14頭の赤ちゃんが誕生しました。飼育下でのクロウミガメの繁殖成功は世界初の事例となります。

誕生からおよそ2年経て、5cmほどだった甲長は30cm以上に成長しました。成長した姿をご覧いただくため、同じ年に生まれたアカウミガメやアオウミガメ、タイマイと共にウミガメ館での展示を予定しています。

(小淵 貴洋)

熱帯植物ずかん vol.08

～パフィオペディルム～

科名: ラン科 学名: *Paphiopedilum* spp.
英名: Slipper Orchid



「パフィオの王様」と称されるパフィオペディルムロスタイルディアナム



属名の由来となるイメージのサンダル



パフィオペディルム エグザル タイ南部の海岸近く(海拔0-50m)に岩生する



パフィオペディルム ハンギアナム 中国(雲南省)からベトナム北部にかけて分布

東南アジアを中心に、東はパプアニューギニア(ブーゲンビル島)から、西はインド(デカン半島)まで、広い範囲に約70種が分布するランの仲間です。ランの仲間は一般に弱酸性の環境を好むのですが、パフィオペディルムは好んでアルカリ性の石灰岩地域に地生する仲間、樹への着生は稀です。

属名は美の女神アフロディテを形容するギリシャ語のpaphiaとサンダルを意味するpedilon(サンダル)の2語からなり、「女神のサンダル」という意味で、袋状の唇弁の形に由来します。この部分は食虫植物を思わせる形をしていますが、補虫して自らの栄養とする事はありません。袋の中に虫をおびき寄せ、袋から出る時に虫に花粉を付け、別の花に虫が移動した時に受粉される仕組みになっています。蜜を提供するわけでもありませんが、虫を巧みに利用して子孫を残す戦略を持っているのです。

(瀬底 奈々恵)

西表島植物誌編纂事業 ～過去と現在の標本から植物相を解明する～



西表島 現地調査の様子

■はじめに

西表島は、沖縄島の南西約400kmに位置する沖縄県内では2番目に大きい島嶼です。面積289・3km²、周囲130kmの島は、その面積の約90%が森林で構成されており、道路や登山道も少なく、島の中心部には人間が容易に近づけない森林が残されています。そのため、近年行われた調査でも、日本初記録の植物が発見されるなど、西表島の植物相(※)が明らかになっていくとは言い難い状況です。

また、世界自然遺産登録に向けても、西表島の植物相を解明することが、この島の保全・普及啓発に大きく役立つ資料となります。

そこで沖縄美ら島財団総合研究センターでは、小山鐵夫(てつお)研究顧問の監修のもと、国立大学法人琉球大学、国立大学法人鹿児島大学、国立大学法人東京大学、国立大学法人京都大学、国立科学博物館などと連携して、平成29年度より西表島の植物相調査を進めています。

■調査方法

植物相調査は主に、標本調査と現地調査を行います。標本調査は、琉球大学、鹿児島大学、東京大学、京都大学、国立科学博物館などの標本庫に収蔵されている西表島産の標本を抽出し、過去の分布の証拠となるデータを収集しています。



現地調査は、島の中心部にも分け入り、標本の採集を行う
※森林への立ち入り、採集に必要な許可を全て得たうえで実施しています



左から、固有種のイリオモテトンボソウ(ラン科)、モノドラカンアオイ(ウマノスズクサ科)、南方系のニッパヤシ(ヤシ科)。多様な種類がみられるのも西表島の植物相の特徴

現地調査は、西表島全域を対象に標本採集を行っています。野外での生物調査の場合、生物季節(フェノロジ)を考慮する必要があります。フェノロジとは、その植物がいつ開花し、結実し(もしくは胞子をつける)、落葉しているかなど、その植物の状態の変化のことを言います。このフェノロジを意識して行うことで、花や果実のついた標本の採集が可能となります。花や果実といった器官は種の特徴をよく表すため、その植物の同定(種の判別)が容易となり、将来的に種類などの見直しが必要になった場合にも、標本の研究利用価値が高くなります。

このように、それぞれの種のフェノロジが重要ですが、西表島では、1年中植物

が花や実をつけるため、毎月、現地へ赴き調査を行います。

■調査の進捗と今後の取り組み

現在、標本調査は、総合研究センター、京都大学、鹿児島大学共同で進めています。現在約600種、2,100点の標本データについて収集しました。

また、国立科学博物館、琉球大学教育学部については、データベースが構築されており、これらのデータを活用し調査を進めていく予定です。今後東京大学、琉球大学理学部でも標本調査を進める予定です。



台湾ルリソウ(ムラサキ科)の標本(国立科学博物館所蔵)
現在野外ではめったに見ることができない種類が標本調査では見つかることもある

2015年に西表島から発見された日本初記録のホソバムラサキ(シソ科)

現地調査は、琉球大学熱帯生物圏研究センターの研究者と連携し、これまであまり調査が行われていない場所を中心に実施しています。令和元年度は、これまでに2回調査に入り、約100種の標本を採集しています(2019年7月末現在)。調査では、100年ぶりに日本で見つかったと思われる種類が発見され、現在確認作業を進めています。他にも、過去西表島からは記録のなかった外来種が新たに見つかるなど、調査の進展によって今後も新たな発見が続くことが期待されます。引き続き現地調査を進め、現在西表島に産する全ての植物についての標本を採集し、後世の研究者が標本情報を元に検証を行うことが可能となるよう、植物誌として編纂します。また研究者だけでなく西表島を訪れる学生や教員の方々も利用できる植物誌として作成することも目標としています。

標本調査・現地調査各々の課題を1つずつ解決し、後世に誇れる成果を上げていきたいと考えています。

(天野正晴)

※植物相:特定の地域に生育する植物の種類組成。

名護青少年の家「健康・体力づくりとダイエット」
運動習慣を身につけ健康寿命を伸ばそう



ヨガマット運動



運動に関する基礎講座(座学)

名護青少年の家では新規事業「健康・体力づくりとダイエット」を2019年5月19日～6月9日の期間、4回実施しました。講師に日本スポーツ協会公認スポーツインストラクターの永井宏氏を招聘し、基礎的な運動方法と個人レベルに応じた運動メニューの作成方法を学び、誰もが適度な運動を継続できる事を目的に「有酸素運動」のウォーキングやジョギング等と筋力トレーニングを併用して指導していただきました。

座学では、有酸素運動の10の効果や、ストレッチングのポイントと実践方法、ストレッチ解消や身体・精神の疲労を回復させる「スポーツ等の競技力を高め、転倒・ケガ・骨折・腰痛の予防になる」等、具体的な効果を学んでいただきました。実践では、ノルディックウォーキングを取り入れるなどし、高齢者の方でもポールを使って歩くことで、足腰に負担がかからず、ひざ痛や肩こりが改善され姿勢が良くなるなどの他、リハビリ・体力づくりにも

効果があること等の解説を交えながら、細かい部分にまで指導を行っていただきました。これにより生活習慣病の改善や肥満対策としての効果が期待され、参加者が健康状態を知り、今後の健康管理に役立てていただくきっかけになったのではないかと思います。講座の結びには、振り返りやその場で聞けなかった疑問、質問を含め活発な意見交換が行われ、参加者や講師、スタッフ間の交流も図ることができました。

参加者からは「運動習慣を身につけて健康寿命をのばしたい。心がけて運動を継続したいと思いました」、「座学と実践で大変わかりやすく楽しかったです」、「1人でも継続しやすい内容でした。どんどん開催して欲しいです」等、内容にとても満足していただいた様子でした。今後も名護青少年の家では、健康づくりをサポートする事業を行ってまいります。

(中曽根 亮)



踏み台昇降



ウォーキング

うぐしくものがたり Vol.20
御城物語

かつて、首里の人々が「御城(うぐしく)」と呼び、敬愛のまなざしで見上げた首里城。首里城とその周辺に関するトリビアを語る歴史エッセイ。

くみおどり
組踊初演

組踊は、中国皇帝から派遣される冊封使の歓迎にあたり「踊奉行」に任じられた玉城朝薫によって創作され、せりふ・踊り・音楽で構成された芸能です。2019年は組踊初演から300周年にあたる節目の年です。1719年(康熙58年)に来琉した冊封副使の徐葆光は、『中山伝信録』(1721年(康熙60年))のなかで組踊初演について記録しており、「執心鐘入」と「二童敵討(護佐丸敵討)」の2つの演目を観劇したことが窺えます。前者は、美少年の中城若松が、一夜の宿を貸した女に言い寄られて追いかけられるところを逃げ、最後は鬼女と化した女が

座主の法力で成敗される物語です。後者は、天下取りの野望に燃える勝連城主・阿麻和利が、その過程で騙し討ちした護佐丸の息子2人によって敵討ちされる物語です。また『中山伝信録』の挿絵に、首里城「北殿」前の仮設舞台の姿を見ることができ、この舞台で組踊が演じられました。北殿は、王府の重要案件の評議や政治行政の場であり、冊封使来琉の際は酒や茶、料理が振舞われる歓待の場でした。北殿前の組踊初演は、琉球王国の文化的・外交の象徴的な出来事といえるでしょう。往時に想いを馳せて「歴史的現場」に足を運んでみてはいかがでしょう。(輝 広志)

徐葆光「中山伝信録」『中山王府中秋宴図』



北殿(外観復元)



首里城公園「中秋の宴」組踊「二童敵討」より阿麻和利の登場

特別展「THE KUMIODORI 300 -組踊展-」首里城公園で開催中(2019年11月14日(木)まで)

沖縄いきものコラム Vol. 2

オオゴマダラ

学名: *Idea leuconoe liukiensis*

オオゴマダラは日本最大級の蝶といわれ、10センチを超える大きな羽をゆったり羽ばたかせながら、舞うように優雅に飛ぶ様子が特徴的です。その飛び方から「南国の貴婦人」や、羽の模様が新聞紙が風に舞っているように見えることから「新聞蝶」の愛称で親しまれています。

食草のホウライカガミ(キョウチクトウ科)には毒であるアルカロイドが含まれており、それを体内に取り込み、貯めることで、他の動物から捕食されることを防いでいるといわれています。幼虫の体色は黒・白・赤と目立つ色で、モノクロの成虫とは逆の印象を与えますが、それは、毒をもっていることを周囲に知らせる警戒色になっています。

さらに、幼虫が蛹になると、体色を黄金色に変えることから、初めて見る多くの方がその美しさに魅了されるようです。

沖縄県那覇市、宮古島市、石垣市の「市蝶」として指定されているほか、沖縄県の「県蝶」候補のひとつにもなっています。

沖縄美ら島財団では、地域連携の一環として「首里城下にチョウを翔ばそう会」と協力し、首里城周辺・那覇市内などで、オオゴマダラをはじめとしたチョウに関する知識の普及啓発活動、地域の環境保全の支援を行っています。(瀬底 奈々恵)



オオゴマダラ成虫



オオゴマダラのさなぎ



オオゴマダラ幼虫



- ①朝礼の様子。
- ②最も混雑するP7立体駐車場の入り口で歩行者および交通整理を行う警備員。
- ③無線で最新情報を現場と共有する。
- ④駐車場の混雑状況は利用サービス係のパソコン画面上でも一目で確認できる。
- ⑤警備室では防犯カメラの映像を一括管理し、海洋博公園全体の状況を把握する。
- ⑥沖縄ビル・メンテナンス株式会社 仲宗根豊警備課課長。
- ⑦神谷学主事。



検証と工夫の積み重ねで イベント時の渋滞も大幅緩和



立体駐車場で車を誘導する警備員。事故防止という重要な役割を担う。

園内の事故ゼロをめざして 財団&警備会社でタッグを組む

年間500万人以上の入園者が訪れる海洋博公園。すべての来園者が安心して楽しめるよう、沖縄美ら島財団(以下、財団)の関係各部署は連携しながら運営・管理を行っている。中でも、安全確保のために警備業務を担っているのが、国営公園管理部企画運営課利用サービス係、協力会社の沖縄ビル・メンテナンス株式会社(以下、OBM社)との協力体制のもと、24時間365日海洋博公園を見守り、安全確保に努めている。公園内の各施設に警備員が常駐するほか、車両の出入り確認と誘導、テロ対策の園内巡回、必要な場合は不審者の追尾、事故が起きた場合の対応等、業務は多岐にわたる。警察や消防との連携も重要で、年に2回は本部警察署、沖縄県警察機動隊、本部町今帰仁村消防組合消防本部、国営沖縄記念公園事務所、OBM社、財団が一緒にテロ対策訓練を行っている。

「大切なのは、日頃からの取り組み。OBM社の皆さんと一緒に毎朝朝礼を行って、情報共有のミーティングをしています。外部の協力会社というより、一緒に公園の安全を守っている同僚という感覚ですね」

とは企画運営課利用サービス係の神

谷学主事。OBM社の海洋博公園警備業務統括管理者である仲宗根豊警備課課長は、海洋博公園の仕事についてこう語る。

「海洋博公園は施設警備、交通誘導、雑踏警備が全てできる人材でないといけない。さらに案内も兼ねているので、高齢者や外国人観光客への対応で気を使います。公園に来たお客様が最初に出会うのは警備員。笑顔で接するよう心がけています」

警備の仕事の基本は、現場を見ること。沖縄美ら水族館に近く、常に混雑するP7立体駐車場で車両事故を減らすため、植物課と連携して周囲の植栽を一部伐採して自然光が入るようにしたり、何種類もの車両で試して運転席から見えにくい柱や梁に注意喚起の反射テープやプレートを取り付けるなど、地道な検証と工夫を重ねた結果、重大事故はゼロに。今は軽微な接触事故が起こる程度だという。事故現場は何度も見て、未然に防ぐための対策を講じるのも、警備の仕事の一環となっている。

また、駐車場の混雑状況をVICSビックス(※情報で発信しており、カーナビ

※VICS(ビックス):渋滞や交通規制などの道路交通情報をFM多重放送やビーコンを使ってリアルタイムにカーナビに届けるシステム。

でもリアルタイムで表示されるようになった。現場に立つ警備員にも無線で情報を共有し、車を空いている駐車場へと誘導している。

1年のうちで警備が最も忙しいのは花火大会があるサマーフェスティバル。1日に約4万人が来園する。例年、問題となっているのが、海洋博公園周辺の渋滞だ。ここ数年、工夫と検証を重ね渋滞は緩和されつつあるが、毎年本部警察署と連携して周辺道路を一方通行にした上、その開始位置や信号のタイミングを調整。団体バスはバス用パーキングから園内の特別ルートを抜けて出るようにルートを変更する。神谷主事は

このようにふり返る。

「去年の反省をふまえて、今年はどうしたいという提案書を作り込んで、本部警察署と協議しました。花火大会終了は夜の9時ですが、10時半には公園内の駐車場にほぼ車がいない状況でした。現場は『もう終わり?』という感じ(笑)。がんばった甲斐がありました」

表舞台には出ない裏方だが、警備は海洋博公園を支える重要な仕事の一つ。今後も目に見えない部分で来場者の満足度を上げることだろう。(文||い||うえちず)

「歌と芸能の島」と言われる沖縄。各地にさまざまな楽曲が残るが、その中でも中国から伝来したと考えられる楽器や音階、楽曲について研究してきた喜名盛昭顧問。2019年6月から総合研究センターの研究顧問に就任した。当然のことながら、明代・清代の音楽は同時代の録音資料がないため、復元するのは困難。各地の豊年祭などで歌い継がれてきた曲を採譜・調査を行い、独自の視点から見えてきたことは。

沖縄美ら島財団
総合研究センター 研究顧問
喜名盛昭 きな もりあき



— 沖縄各地に残る中国民俗音楽を研究されているそうですね。
喜名 「琉球王国時代は中国との交流が盛んでした。文化交流、経済交流の中で、中国音楽や芸能が入ってきた。特に久米三十六姓(※1)に代表される、中国系の子孫が多い久米村では中国伝来の音楽や演劇が演じられてきました。琉球が薩摩に支配

されて以降、いわゆる『江戸上り(江戸立ち)(※2)』で、それが使われていくわけですね。中国的な衣装で中国的な演劇や音楽を披露することを、薩摩が望んでいました。江戸上りを機に、琉球使節が披露した芸能が日本で記録されるようになりま

(※4)を中心に、獅子舞や組踊を使う曲も含めて13の集落で27曲を収録採譜しました。ほとんどが琉球音階に変化していますが、中国音階で伝承保存されている音楽が15曲もありました。地元ではだいたい200年〜250年くらい前から伝承されているようです」

— 中国音階は日本と琉球の音階とは全く異なるものですか？

喜名 「中国音階はドレミソラの半音を含まない全音階的五音階です。日本の音階は律音階(ドレファソラ)、都節音階(ドレファソラ)、民謡音階(ドレミファソシ)、琉球音階(ドレミファソシ)の4種類です。いずれも半音を含む五音階なので、中国音階とは全く違う音階になります。しかし明治以降、文部省唱歌など、新しい音階で作曲されるように

なったのが、ヨナ抜き音階(ドレミソラ)です。ドから数えて4番目と7番目の音を省いた音階です。山田耕作の『赤トンボ』や千昌夫の『北国の春』などその他数曲があります。中国音階もヨナ抜き音階と同じドレミソラの音を用いていますが、歌われるメロディーが中国的か、あるいは日本のかは言葉の持つ抑揚(発音)との関わりが大きく関係しています。ですから中国語で歌う曲を演奏する時などは中国的独特なメロディーになつて聞こえてきます」

— 行進曲のような使い方の路次樂も御座樂もやはり中国伝来の音楽ですか？

喜名 「そうですね。中国の伝来音楽です。明朝と清朝の音楽なので、日本では明・清楽とも言われています。路次樂は山内盛彬(※5)氏が1923年(大正12年)に採譜した楽譜が『琉球王朝秘曲の研究』に記載されています。さらに琉球王府最後の路次樂の師匠であった知念三郎氏の御子息である知念賢松氏から習い受けて、現代まで継承していた阿波連本勇氏の路次樂曲五段の録音が残されています。しかし、いずれの路次樂も既に琉球音階に変化した楽曲になっています。御座樂(※6)については記録資料のみで、肝心の音源の基にな

ほとんど残っていません。歌詞や曲名なども、日本本土のほうが数多く残っているんですよ」

— 日本の人たちも異国の文化の物珍しさから記録するわけですね。

喜名 「琉球王国で作成された絵巻もありますが、日本の絵師が描いた絵巻がたくさん残っています。それらを元にして、いわゆる江戸上り芸能がどのようなものだったのかという研究が行われています」

— 中国音楽に興味を持ったきっかけは何でしたか？

喜名 「琉球大学教育学部音楽科(現・国立大学法人琉球大学教育学部音楽教育専修)を卒業後、高校の音楽教諭になってから西洋音楽の一点張りでした。30代の時、中城村伊集の打花鼓(※3)を一度聴いてみないかと誘われて、見に行っただけです。実際に曲を聴くと、なるほど中国的だ。歌詞の意味もわからない。これは面白いと思って調べ始めたのが最初で、音楽の先生が道を踏みはずした？(笑)。それからは芸能研究に走り出しました。『打花鼓』についての先行研究の本では『唐の按司の行列と街道芸能である』とか『中国劇であることは聞いているがその内容については全くわからない』と

書かれました。中国語辞典によると、『打花鼓』は中国安徽省の民間芸能であることがわかりました。さらに江戸上りの資料には打花鼓劇のあらすじと四人の登場人物、そして絵巻図があり、中国語辞典に書かれている内容と同じであることから、演劇であったことを確信しました。台湾や上海で見つけた清代に編みされた『綴白裘』には、古い『打花鼓』の脚本が収録されていました。そこから伊集の打花鼓は中国戯曲の一部であったと考えられます。また伊集の伊集では3番までの歌詞を歌っています。しかし5番や9番の歌詞が入り交ざって歌われているので、意味不明な箇所もあります」

— それは新発見ですね！

喜名 「伊集に伝わる由来によると、那覇で奉公していた人が、いわゆる琉球処分後に村に帰って伝えたとされています。これを皮切りに、沖縄本島各地に残る、中国伝来の音楽を調べるようになりました」

— どのようなものがありますか？

喜名 「哨哨というチャルメラに似た楽器を主旋律にして練り歩く路次樂

る工尺譜(※7)も無い状態なので、当時どのように演奏された曲かは全く不明の状態です。しかし江戸上りの資料の曲名や歌詞を基に、中国福建省で調査し、類似した曲を探し出し現在いくつかの曲が御座樂研究会等によって演奏されています」

— 楽器の復元も含めて更に研究が進むと面白くなりますね。

喜名 「楽器に関しては既に、沖縄美ら島財団が徳川美術館所蔵の楽器を模造復元しています。その他に研究を進めていくと琉球王国時代に演じられた『風箏記』『借衣靴』(※8)などの古い中国戯曲(短編)の脚本が見つかりました。いずれも滑稽な喜劇劇になっています。演劇が再現できると地方劇の独特な台詞や音曲も聞くことができるでしょう」

— 江戸城では日本語で上演したのでしょうか？

喜名 「唄や奏曲は江戸城で、戯曲は江戸の薩摩屋敷で中国語で歌われ、演じられた記録があります」

— 組踊は琉球語のまま上演して冊封使に見せましたし、江戸城では中国語で歌われています。

(文いいうえちす)

※1 琉球王国時代に中国の皇帝の命を受けて琉球に渡ってきた職能集団。
 ※2 琉球王国時代の薩摩藩支配以降、徳川将軍と琉球国王が代替りするたびに派遣した使節。
 ※3 中城村伊集に伝わる中国風の民俗芸能。14世紀に久米三十六姓により伝わったとされる。
 ※4 琉球王国時代の中国伝来の宮廷音楽。琉球国王の外出や江戸上りの際の行列に吹奏された。
 ※5 音楽家・音楽研究者。1890年、現那覇市首里生まれ。古典音楽から民俗音楽まで幅広く研究。
 ※6 琉球王国時代に宮廷儀式と冊封儀式および江戸上りにおける儀式の場などにおいて、宮内で行われていた宮廷音楽。
 ※7 文字譜の一種で、中国や日本等、漢字圏の国々で広く行われていた楽譜の表記法。
 ※8 中国の史料には、『風箏記』『借靴』と記されている。

これからも沖縄の海の魅力を伝えます 沖縄美ら海水族館入館者5000万人達成



写真前方 尾坂さんご家族
写真後方左より沖縄県 土木建築部 宜保 勝参事、古堅 孝常
務理事、宮原 弘和館長、内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄紀
念公園事務所 鈴木 武彦所長

沖縄美ら海水族館は、2002年「沖繩の海との出会い」をコンセプトに、「世界初のサンゴの大規模飼育展示」や、「繁殖を目指したジンベエザメの複数展示」、「未知と神秘に包まれた沖繩の深海を再現した展示」など、沖繩の海の魅力を発信して参りました。

県内外のみならず、遠く国外からも多くのお客さまに愛され2019年6月29日、開館から16年と7か月で、入館者5000万人の節目を迎えることができました。記念すべき5000万人目のお客さまは兵庫県からお越しの尾坂風花さんでした。

これもひとえに多方面よりご支援ご協力くださった方々のおかげと、心より感謝いたします。今後も、沖縄県を代表する施設として、世界・世界初の試みに挑戦し、常に新しい発見のある水族館を追求しつづけ、多くの方に沖繩の海のすばらしさを伝えていきたいと思えます。



通常のトレーディングカード。全12種類。
幻のレアカード。何が出るかは楽しみ!

沖縄美ら海水族館の仲間たちがトレーディングカードになりました。今回登場したのは全12種類。お馴染みの生き物や、水族館マニアも唸る生き物がカードで登場!裏面には生き物の解説の他、飼育員のコメントや豆知識も記載されています。なんと目玉は、幻のレアカード(2種類)。子どもから大人まで、集めて楽しく学べる沖繩の海の魅力たっぷりのトレーディングカードとなっています。カードは8/1~9/1開催「美ら海ナイトアクアリウム」で配布を一旦終了しましたが、今後もイベント開催時に配布を予定しております。今回、入手できなかった方々も第2弾の際に、ぜひゲットしてみてくださいはいかがでしょうか?

琉球料理の発展・継承に活用します 株式会社儀間より 寄付金をいただきました

2019年6月12日、株式会社儀間より、沖縄美ら島財団の取り組み「琉球料理に関する調査研究普及啓発事業」に対して、300万円をご寄付いただきました。

株式会社儀間の代表取締役社長 儀間 恒雄様からは「琉球料理の継承に役立ててほしい」とコメントをいただき、当財団から感謝の意を込めて、儀間様へ感謝状と記念品を贈呈しました。

当財団では、今回のご寄付を機に、2016年10月に設立した「琉球食文化研究所」を拠点とした伝統的な琉球料理の調査研究をさらに推進し、無形文化財である琉球料理の発展・継承に取り組んでまいります。



左より、株式会社儀間 儀間 恒雄社長、花城 良廣理事長
「琉球料理 美榮」創業者・古波蔵 登美氏肖像の前で

サンゴ類標本寄贈 野島 哲博士に感謝状を贈呈



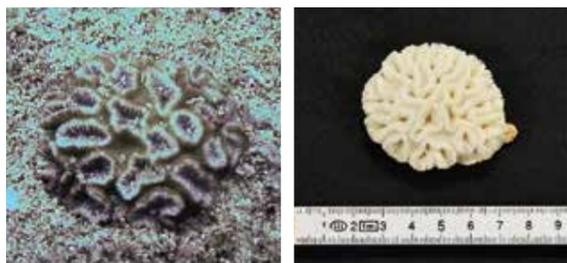
野島哲博士

元国立大学法人九州大学理学部教授の野島哲博士より、西インド洋におけるサンゴ礁調査で収集されたモリスヤス産のサンゴ類標本17種、19点を寄贈いただきました。このほか、九州大学附属臨海実験所のある熊本県天草産のサンゴ類24種、38点についても寄贈いただいております。

感謝の意を表し、2019年7月26日、感謝状を贈呈いたしました。寄贈いただいた標本は、今後当財団の調査研究および学習教材に活用して参ります。



Ctenella chagius (左:生態写真、右:標本)



Horastrea indica (左:生態写真、右:標本)

野島博士コメント
「私たちに身近な西太平洋海域はサンゴの種多様性が高い場所ですが、インド洋には西太平洋海域では馴染みのない種も多く見られます。今回寄贈させて頂いたモリスヤス島産サンゴもその中に含まれます。ぜひ有効活用していただければ幸いです。」

沖縄美ら島財団理事長 花城 良廣 日本観光振興協会 観光振興事業功労賞受賞!

当財団理事長の花城良廣が日本観光振興協会観光事業功労賞を受賞しました。沖縄県内から表彰されるのは、10人目となります。



受賞者の方々(前列右が花城 良廣理事長)

受賞理由としては、海洋公園・首里城公園等の管理運営の展開、県外・海外での積極的な広報宣伝の継続および、1986年(昭和61年)より33年間開催されている「沖縄国際洋蘭博覧会」やアジア太平洋蘭会議・蘭展の沖縄誘致など、多方面へ向けた沖縄の魅力発信の功績が認められたことによるものです。

これからも沖縄美ら島財団では、沖縄県の観光振興に寄与して参ります。

まさひろ酒造株式会社より 寄贈・寄託をいただきました



左より、まさひろ酒造株式会社 比嘉 昌晋代表取締役会長、花城 良廣理事長

比嘉昌晋様からは「沖繩にあるべきだと思いい0年前に福岡県の骨董店から購入した。琉球文化研究の発展の一助になってほしい」とコメントをいただき、当財団から感謝の意を込めて、比嘉様へ感謝状と記念品を贈呈しました。

寄贈された書跡は、琉球人の書4件(4点)と、清代冊封使節の書2件(3点)に大別でき、尚育王の書や、冊封使に随行し詩人・書家としても有名な王文治らのものとみられる書が含まれております。

寄託された染織資料「紗織龍文衣装」は、これまで現存が確認されていない琉球国王の夏用の衣装の可能性が有ります。本史料は首里城基金として受け入れ、劣化箇所を修繕等をはじめとした調査研究を進め、首里城公園新収蔵品展にて展示公開を予定しております。



寄託された染織資料
「紗織龍文衣装」

喜名顧問へのインタビューを通して、琉球王国時代に伝わったとされる中国の音楽や劇などが、今でも沖縄本島の各地域の伝統芸能として引き継がれていることに感銘を受けつつ、往時の交流が、沖縄の文化に大きく影響があったことを改めて感じました。(SK)

おもろさうしの

植物

其の十八

琉球王国第4代尚清王代に首里王府によって編纂された歌謡集「おもろさうし」に登場する植物の紹介コーナー。
※ 海洋博公園内おもろ植物園で見ることが出来ます。

〔こば〕

(ピロウ)

「解説」

百名(玉城村)の白南風が吹くと、和やかに若君神女をお招きしよう。わが村に白南風が吹くと、和やかに若君神女をお招きしよう。お迎えの船を漕ぐことに、クバの花が咲いているように美しい。お迎えの船の櫂を掻きやることに、波の花が咲いているように美しい。

「うらうら」は、白南風、梅雨明けの南風。
「こば」は植物名。蒲葵。ピロウを方言ではクバという。神の降りる神木。まっすぐ伸びる高い木で、御嶽の象徴とされている。花は黄色。

梅雨明けの南風が吹く頃になると、海は穏やかになるので若君神女をお招きする船を出そう。お迎えの船を漕ぐことにいそいそとしている村人たちのようすがわかるオモロである。

一 百名 浦白吹けば

うらうらと 若君 使い

又 我が浦は 浦白 吹けば

又 手数 は ころの花 咲きよら

又 掻いやるは 波花 咲きよら

「第一七卷一二二八」

百名(旧玉城村)に白南風が吹くと
和やかに若君神女をお招きしよう
我が村に白南風が吹くと
和やかに若君神女をお招きしよう
船を漕ぐことに
クバの花が咲いているように美しい
櫂を掻きやることに
波の花が咲いているように美しい



おもろ名 科名 和名 科名
こば ヒロウ 科名 ヤシ科
クバ

一口メモ
ピロウは九州南部以南、中国南部から琉球列島を経て台湾に分布する。高さ15メートル程になる高木。花は黄色で4〜5月に咲き独特の香りがある。実は楕円形で9〜11月に熟する。神木として御嶽でよく見られ、沖縄本島の北部の大宜味御嶽のピロウ群落や伊平屋島田名のクバ山は沖縄県指定の天然記念物となっている。街路樹や、防風、防潮林として植栽されるほか、材は柱や籐織、ステッキなどに用いられる。葉は水を汲むつるべや扇子、クバ笠に利用される。

※ 出典:「おもろさうしの植物」 発行:(財)海洋博覧会記念公園管理財団(現・(一財)沖縄美ら島財団)

沖縄美ら島財団



沖縄美ら島財団
総合研究センター



海洋博公園



首里城公園



美ら島
自然学校



当財団では、これまでに蓄積してきたノウハウを活かし、普及啓発、環境保全、地域貢献等の活動に取り組んでいます。

美らなる島の輝きを御万人へ

沖縄美ら海水族館



沖縄県立
名護青少年の家



なご
アグリパーク



沖縄県立博物館・
美術館(おきみゅー)



2019年10月発行

一般財団法人 沖縄美ら島財団広報誌

企画・編集・発行

一般財団法人

沖縄美ら島財団
Okinawa Churashima Foundation

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888

TEL.0980-48-3645 FAX.0980-48-3900

季刊誌 南風 秋号 vol.53 2019.10~12

制作・印刷/株式会社 東洋企画印刷

〒901-0306 沖縄県糸満市西崎町4-21-5



この印刷物の情報は個人情報保護マネジメントシステム(プライバシーマーク)を適用しています。
株式会社 東洋企画印刷 プライバシーマーク (24000430)

ISSN 2189-4140